

Background

この度の演奏会のテーマは昨年に続き『イギリスのマドリガル』ですが、もうひとつのテーマが『Ave Maria』です。宗教音楽のテーマとして大変人気のあるマリア様ですから、宗教画のモデルとしても大層人気があります。ルネサンス期のマリア像はふくよかで美しい理想の女性像のように描かれた作品が数多くありますが、今回の演奏会にご登場いただいたマリア様もやはり美しい。作者は有名なレオナルド・ダ・ヴィンチ様です。実はこの作品には同じ構図で2種類の作品が存在するのですが、その理由は…いえ、その前にルネサンスの時代について少しだけ。

ルネサンスとは、西欧の人々の「見たい、知りたい、表現したい」欲求が溢れ出した時代です。美しいものを神（教会）だけに独占させるのはつまらない「オレ達にも楽しませろ」そう考えた人々が各分野に登場したのです。しかし、絵師に絵を描かせ、音楽家に作曲させるにはカネが必要です。中世の時代にカネが集中したのは教会（ローマカトリック）でした。しかしやがて、アジア、アフリカから宝石や毛皮、香辛料などの産物の流通が増えるにつれて、裕福な交易商人が誕生します。地中海で縦横無尽に帆船を操る船乗り達を生んだ、イタリア半島のジェノバ、ヴェネチアなどの都市国家の人々です。裕福な商人は都市国家を繁栄に導き、関連産業にカネをまわすこととなります。この結果、富を蓄えた人々が絵師や音楽家の新たなスポンサーとなったのです。

新たなスポンサーが、神のため（だけ）ではなく、人（自分）のためにも絵を描かせ、音楽を作らせた結果、神に一步近い職業だった絵師と音楽家に更に優秀な弟子が集まり、一人前になった弟子達は新たなスポンサーを求めて西ヨーロッパの宮廷を旅します。

その時代を代表する天才レオナルド・ダ・ヴィンチ不朽の祭壇画『岩窟の聖母』（チラシで使用した左の作品、パリのルーヴル美術館に所蔵）。本来ならばミラノのサン・フランチェスコ・グランデ聖堂の礼拝堂を飾る作品であったが、



岩窟の聖母 ルーヴル版

当時、レオナルドとこの祭壇画の依頼主との間で作品の構成や報酬を巡りトラブルがあり、それを仲裁した（当時ミラノを治めていた）フランス王ルイ12世に、レオナルドが献上したとされる。本作では聖母マリアを中心に、左に幼児の姿をした洗礼者聖ヨハネ、右部分に祝福を与える幼子イエスと、大天使ウリエルを配されているが登場人物に神的人格の象徴である光輪が描かれていない点や、大天使ウリエルが人差し指で首を斬る仕草で（聖ヨハネの死を暗に）示している点、洗礼者聖ヨハネと幼子イエスの明確な区別が為され



岩窟の聖母 ナショナル・ギャラリー版

ていない点（通常、洗礼者聖ヨハネにはアトリビュートである獣の衣や十字の杖などが描かれる）などから祭壇画としての役割が果たせないとして、祭壇画の依頼主から（未完成であるから、と）受け取りを拒否されたいらしい。後方の屹立した巨石は『無原罪の御宿り』への皮肉ではないかという指摘もあり、レオナルドが祭壇画の依頼にこの絵を描いた意図が何だったのか、記録が無いのでわからないが、ギャラが安かったのか、依頼主が気に入らなかったのか、想像するだにほくそ笑んでしまう（が、依頼主との間で20年間に及ぶ訴訟があったらしい）。

そして、描き直されて改めてサン・フランチェスコ・グランデ聖堂へ納められたのが、当プログラム表紙に使用した右側の作品。構図はルーヴル版とほぼ同じであるが、やや硬質な表現手法などから、描いたのは共同制作者だったデ・ブレディス兄弟の作品だろうと言われている。依頼主の意向を汲み、幼児洗礼者聖ヨハネにアトリビュートである十字の杖と衣を加え、幼子イエスとの間に明確な区別が為されている他、大天使ウリエルを除く聖母マリア、幼子イエス、幼児洗礼者聖ヨハネには神的人格の象徴である光輪が描かれている点や、大天使ウリエルの軽やかな衣服の表現やポーズの変更など、ひと言で言えば毒気を抜かれた眠たい絵になってしまっている。（か）